
銀の魔法使い。

銀風 鈴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の魔法使い。

【Nコード】

N3102D

【作者名】

銀風 鈴香

【あらすじ】

超めんどくさがりな銀色の髪的主人公（女）が繰り広げる学園（？）ファンタジー！最強な女の子やヘタレの男の子、さらにはお爺さんなんかも出てきて・・・！？常識人（？）なのが狐だけってどうなんだ！？

プロローグ（前書き）

ここは本当にプロローグなので飛ばしてくださってかまいません。

プロローグ

ここは、ある町の商店街。

いつもは、とてもうるさい場所だか今は、静まり返っている。
なぜなら、今は夜中。こんな時間に外に出る人間なんて、普通はい
るはずなかった。

季節は冬。

しんしんと降り積もる雪。

目立つ色にぬられていたお店の屋根も、普通の家の屋根も、みんな
真っ白になっていく。

そんなところに、彼女はいた。

ボロボロのコートに、ブーツ、彼女の手には、とても大きい、手袋。

全部、「銀」色だ。

よく見ると、彼女の髪の色も、「銀」色。

瞳の色は、右目が青色で、左目が、緑色だ。

色違いの目は、昔から、災厄の原因として、しいた虐げられてきた。

その者が、老人であろうと、若者であろうと、子供であろうと、同
じこと。

この少女も、妨げられてきた物の一人だった。

だけでも、彼女は、そんなことは無かったかのように、あどけない顔をしている。

よく見ると、彼女というより、少女といったほうが合っている年齢だ。

「今年も……この季節が来たね……。」

嬉しい様な、悲しい様な声。

少女は、雪の降る、この季節が好きだった。

「人の心も……この雪のように、真っ白のようになればいいのにな……。」

これは、この少女がこの季節になるといつも思っていることだった。

彼女が、今まで、一番強く願ってきたこと。

けれど、絶対に叶わない夢。

ほう、と白い息を吐く少女。

これから、この少女はどんなことをしてゆくのか。

それは、誰にも分からない。

この少女にも。

「銀」世界の中、少女は歩き出した

。

プロローグ（後書き）

ども。銀風です。

魔法ものが書いてみたいなあゝ、って思ってた書いてみた作品です。
未熟ですが、暇な方、読んでみてくださいっ！

第1話 風邪・・・？

「ふい、ふい、ふいくしゅんー！」

大きくしゃみをしてるのは、中庭のベンチに座っている少女。

この少女の名前は、ニヤルガ。

ニヤルガ・ミユウ・ラビネス。

今年で13歳。

見た目には、8、9歳くらいにしか見えなくて、ニヤルガの悩みのひとつだ。

髪の色は、「銀」色。自分の体の中で、唯一気に入っている場所といてもよかった。

瞳は、青と緑の色違い。半分しか開いていないけど・・・。

ニヤルガの今いる場所は、レイニール学園という魔法学校。

ここの学園長は、トム・アルベルト。年齢不詳。昔、ものすごく強いドラゴンを封印したとかしてないとか。

この学園は、小等部から中等部、高等部まであって、一学年あがるには、毎回試験を受けなければならない。

そのため、何年も留学する生徒もいるわけ。

だから、クラスの年齢差がかなりあって、ひどい時には、老人と若者が一緒に授業、なんていうときもある。

この学園は、かなり人気があって、入るのは、かなり困難だ。

人気のある一番の理由は、やはりこの学園が、有名な魔法使いを育ててきている、というものだろう。

「はうう~~~~。誰かウワサでもしてんのかなあ……。」
鼻をすすりながら、桜の花びらが振ってくる空を見上げた。

「もうこの学校に入学してから、3年、か……。」

ニヤルガは、春を教えてくれる桜の木を見て、そうつぶやいた。

『ちよつとニヤルガ。今日、進学してから、初めての授業ですよ。早く行かないと、新学期早々、遅刻しちゃいますよっ！』
高い、女の子の声がした。

ニヤルガの頭の中で。

『ああ。そうだった。ありがとー、ミロ。』

その声に、頭の中で言葉を返す。

コレは、テレパシーという、魔法の一種。

『急いでくださいよう！遅れちゃいますよう！』

ニヤルガの足元で、慌てているのは、真っ白な狐^{きつね}。
この狐が、ミロ。

ニヤルガとテレパシーで会話していた狐。

だが、もちろん、ただの狐ではない。

『ハイハイ。……まったく、几帳面な妖精だな……。はあ。』

後半はかなり小さな声で言ったのだが、テレパシーなので、ミロに聞こえた。

『ちよつと！なに言ってるんですか！？ニヤルガが私を呼び出したんでしょう！？』

ミロは、妖精なのだ。狐の姿は、妖精の姿でいると目立つから、ということに変身している。

妖精は、魔法を使えて、しゃべれたりする種類もいるので、使い魔として人気が高い。

そんな妖精は普段、妖精界にいて、魔法使いに呼び出されると、そこから出てくるのだ。

つまり、ニアルガがミロの主人なのだが、正直言って、2人は対等の立場といってもおかしくない。

『分かってるって……。ありゃ？教室ってどこだっけ？』

ベンチから立ち上がり、読んでいた本を、腰につけているウエストポーチにしまう。

『中等部の3-1！……。まったく、自分のクラスくらい覚えておいてよ……。』

見ての通り、ニアルガはかなりめんどくさがりのうえ、物事をすぐ忘れる。

だから、ミロはかなり大変な思いをしてきた。

『あはは。ごめんごめん。クラス発表の時、寝てた。』

『あつさりいうなあゝ！……。って、ニアルガそのまんまの格好で教室に行く気？』

ニアルガの今の格好は黒いローブに長ズボン、ブーツ、手袋。そして白いウエストポーチ。

『え？特に問題ないと思うけど……。』

『そこじゃなくて、髪の色とか……。』

ミロに言われて、「ああ」という顔になる。

髪の毛は銀色、そして色違いの目。はつきりいうと、

超目立つ。

『はあ……。この髪の色、好きなのに……。』

ブツブツ文句を言いながらも、ウエストポーチの中から、銀色の指輪を取り出す。

真ん中に、赤い石が入っていて、すごい高そう。

この指輪は魔具。

魔具というのは、魔法がかかっているものや、魔法使いが作ったも

の、そして魔法使いが使うものの事だ。

『まあ、そーゆー事言わないで。』

ハア、と溜息^{ためいき}をつきながら、指輪を右手の中指にはめる。

その瞬間。

ニアルガの体が光り輝いた。

「銀」色の髪の毛が根元から黒色に変わり、後ろで、ちょこつとしか結べてなかった髪の毛が腰の辺りまで伸びていく。色違いの目が、深紅に変わっていく。

そして、ニアルガの13歳の体が、17、18歳あたりの体格になっ
ていく。

『ふう。このローブ、体に合う大きさになるようにつくつといて良かった』

その声は、さっきまでのニアルガの声ではなく、もっと、威厳のある、低めの声だった。

ニアルガのしゃべり方で台無しだが。

ニアルガの身に付けているローブも指輪と同じく魔具。

『うん。やっぱり、元の姿のほうが好きだけど、やっぱりお母さんの姿もいいねえ。』

あの魔具の指輪はニアルガのお母さんの物。

あの指輪をつけると、お母さんの姿になれるのだ。

（しかも、いつの歳にでもなれるから変装にもってこいなんだよね。）

っていうのがニアルガの言い分。

『はあ。今年から、変装やめたらいいのに。別に、飛び級がいけないわけじゃないんでしょう?』

ニヤルガは飛び級して、中等部に入っているのだ。

普通、ニヤルガの歳だったら、小等部の3年くらいだ。

小等部は、7学年まであるから、6年ほど飛び級したことになる。

だから、クラスの人達と、かなりの年齢差がある。

『だって、目立つのヤダしい』

(いや、もうすでに目立ってるんだよ?ニヤルガって、にぶいなあ・・・)

ミロの思っていることは正しい。

ニヤルガは、大抵の授業は、ボーツとしてるし、本人は気づいていないかもしれないが、休み時間の時は全身から、「近づいて来るなオーラ」が出てる。

したがって、友達是一人もいない。

友達がいらないのはいいとしても、授業中がやばい。

先生に、授業であてられると、教科書を丸暗記してるから、百発百中だし、実戦の魔法の授業でも軽々とやってのける。

裏で密かに「黒のロボット」なんて呼ばれてたりする。

なんで黒なのかというと、ニヤルガがこの姿の時、着ている服は100%とっていいほど黒色だからだ。

(まあ、本人が気づいてないならいいんだけどね・・・)

『さーて!ミロ、案内してよ。』

ニコツと、ニヤルガは笑った。

『ハイハイ。こっちですよ。』

まったく、ニヤルガといると、気苦労するよ・・・

そして、ニヤルガの、新しい学校生活が始まったのだ。

第1話 風邪・・・？（後書き）

ども。銀風です。

2話書いてよかったです。

あと、読んでくれる人、ありがとうございます！
未熟だと思いますが、よろしくお願いします！

誤字脱字あったら、教えてくださるとありがたいです。

第2話 クラスメイト・・・？

『ひゃっほー！！』

パリーン！

女の人の声と同時に、窓が割れた。

って！窓から人来た！？ここって三階じゃなかったっけ！？

ここは、中等部の廊下。

ニアルガとミロは、3 - 1の教室に行くためにここを通っていたのだ。

女の人は、目の前にいるニアルガを無視して、

「ふう。着地成功！」

なんて言ってる。

『どうしよう・・・。目の前に立たれたら、さすがに無視できないよ・・・。』

女の人が入ってきた窓は、ニアルガのちよつと前の窓。

『無視できない、というよりは、ガラスの破片で、通れませんか・・・。』

ミロはニアルガにそういった。

「ほら！あんた、重いのよ！さっさと起きろ！！」

女の方は抱えていたものに話しかけている。

『ねえ・・・。ニアルガ・・・。あの、女の方の持つてるアレって・・・まさか・・・？』

『うん……。アレは人だね。完全に。』

女の人は軽々と、17、18歳あたりの男の人を抱えていた。
女の人も、よく見ると、17、18歳くらいだ。

『ひよ、ひよええええ！！じゃあ、あの人って何なんですか！？
殺人鬼！？』

その言葉にニヤルガは首を横に振った。

『いや、まだ生きてるみたいだよ。死にかけてるけど。』

確かに、男の人は、白目をむいているが、生きているようだ。

「ん？あれ、人いたの？ゴメンね」。あとちょっとでぶつかるところだったみたいだね。」

女の方は、ニヤルガに気づくと、謝った。

なんか、適当な人だなあ。

なんて思うミロ。

『ニヤルガ？ぶつかってたら死んでたと思うんだけど……。あんな謝り方でいいの？』

『え？別にいいよ。今生きてれば。』

ニヤルガも適当な人だからいいのかあ……。

以外に気が合うのかな……。とか思う、ミロ。

「あ。そー言えば、自己紹介すんの忘れてたわ。私は、ミラ。ミラ・フォスタ。よろしく！で、こっちのだらしのない奴は、ユウキ。あれ、苗字忘れたわ……。一応東洋人よ。」

普通に自己紹介し始めたよ、この人……。

「私は、ニヤルガ・ミュウ・ラビネス。よろしく。」

……
って、ニヤルガも普通に自己紹介しちゃってるし・

まともなのって、わたしだけなのかなあ……。とか思う三口。

「そう。ところで、3・1の教室って、どこか知らない？ 私達、今日からそこで勉強とかすることになってるんだけど……。」

この人達、クラスメートかよっ！

『……。この先、大変そうですね……。ニヤルガ……。』

「3・1って、私も確かそこで勉強することになってたような……。」「」

『って、そっからですか！？ さっき3・1ですって私言いましたよっ！？ もう忘れたんですか！？』

『ありゃ？ そだっけ？』

ここまで、物忘れ激しいと、脳みそがちゃんとはいつてるのかさえ怪しくなってきたなあ・・・ニヤルガ。

「え？ニヤルガも3・1？もつと年上かと思ったよ。同い年かあ。大人びてるね。」

急にだらけた口調になったミラ。

『これ、もしこつちが年下だつてばれたら、どうなるんでしょうかねえ・・・。』

『・・・それは・・・ちょっと怖いかも・・・。』

「ん・・・んあ・・・？ここ・・・どこ？」

ミラに抱えられていた男・・・ユウキだったけ？が起きた。

「あ。ユウキ。起きたの？だつたら自分で立つて。」

ミラはパツと手を離す。

「どはあ！？」

まだ完全に立ち上がっていなかったため顔から落ちる。

『痛そお。。。』

おもわず顔に手をやるミロ。

「いってえ。。。いきなり手離すなよっ！ミラッ！」
顔を抑えてユウキ。

「気絶してるアンタが悪い。」

「なっ！？気絶させたのミラだろ！？」

その後二人の争いが続く。

「えつと。話の途中悪いのですが……。」
なんとなく敬語のニヤルガ。

「何（よ）（だよ）！？」「」

『おお……。見事なハモリ……。』
感嘆するミロ。

「あと1分で授業始まると思うんですけど……。？」

「『『ああ〜！！忘れてたあ！』『』」

ってミロ、あんたもですかい。

「もたもたしてられないわっ！！行くわよ！ニヤルガ、ユウキ！！」
ガシッ！ガシッ！

「「はい？」「」

ミラに首元をつかまれた。

も、もしかして……。？

「どりゃあ～～!!」

ミラはそのまま走り出した。

「や、やっぱりかあ～～!!」

『ニアルガ……。^{ゲット}^{ラック}幸運を祈ります!!』
敬礼するミロ。って!

『なっ!?!は、薄情者～～!!!!』

ニアルガの声は、ミロの頭の中でむなしく響いた……。

第2話 クラスメイト・・・？（後書き）

ども。銀風です。

遅くなつてすいません・・・。

次は早く書けるようにがんばります・・・。

あと、感想とか、直したほうがいいところとかあつたら、教えてくださるとありがたいです・・・。

第3話 トーナメント・・・？

「よっしゃー！ギリギリセーフッ！！」

3・1の教室の前でガッツポーズをしているのは、もちろんミラ。

「よかったわね！ユウキ、ニヤルガ！」

ニコニコしてミラが振り返るとユウキが

「良くねえよ！！イキナリ走るなッ！！」

と言った。

「何よっ！間に合ったんだからいいの！」

「あの・・・窓ガラスはアレで良かったの？」

ニヤルガがそう聞くとミラはちよつとあせつたようになって

「え？・・・い、いいのよ別にっ！減るもんじゃなし！」

といった。

いや、アレはおもいつきり減るものだよ・・・？

「・・・。しょうがないんだなあ・・・ミラの性格は直しようが無いから・・・」

ボソリと呟いたユウキだったが、ミラには聞こえなかったらしい。

その言い方から、きつと昔からトラブルやら何やらに巻き込まれてきたのだろう。

「う、ご愁傷様です・・・。」

「ニヤルガ、何ブツブツ言ってるの？さっさと教室に入るっ！」
ミラに言われて教室の入り口に立っていたことに気づく。

こりやあとから入ってくる人に迷惑だな。どけよう。
ユウキと一緒に教室の中に入る。

「おお。なんか2年の教室と全然違うな。」
確かにそうかもしれない。

ニヤルガが去年いた2・4のクラスは1人1つ机があつて、小学校のような感じだったが、3年は横に長い机が何個か置いてあつて、そして奥にいくにつれて高くなつていて背が低くても大丈夫そうだ。
「なんてゆうか、大学みたいですね。」
「つていうかなんで1年上がるだけでこんなに内装が変わるんだ？」

「ほら。ボサツとしない！」
ミラに引つ張られて真ん中あたりの席に座る。

ゴーンゴーンゴーン。

「あ。鐘なつた。」

「・・・いつも思うけど、何故寺のような鐘なんだ？
この学校見た目からして完全に洋風なのに・・・。
合わないさ過ぎる。」

ガラガラガラッ！

大きな音を立てて、3・1の教室のドアが開いた。

つて言うか、この教室に横開きの扉もおかしいような・・・？
洋風な外見のこのレイニール学園。中身（教室）も、もちろん洋風で、横開きのドアよりも、普通のドアのほうがあっている感じた。

「ウィーッス。俺はこの3・1の担任になったクリス・クレアント

だ。よろ。」

入ってきた人物は男の人。

見た感じ20代だろうか？

金髪に青い目。イケメン・・・なのだろうか？

って言うか馴れ馴れしすぎるっ！？

教師の癖に思いつきりタメ口ですかっ！？

しかも「よろ」って略してるしっ！？初の顔合わせなんだからちゃんと云おうよっ！？

「さて、イキナリだが、このクラスでやっていくためにパーティを決めようと思う。」

マジでいきなりですねっ！？

ちなみに「パーティ」って言うのは、クラスとかで一緒に課題とかをこなしていく仲間みたいな感じかな？ただ1人が補習とかになるとパーティ全員連帯責任になっちゃうから、簡単に決めちゃうと後がキツくなってしまう。

ってことで結構重要なことなんだよね。1年間変更きかないし。

「それで、簡単に決めちゃうとつまんねえから、面白いやり方で決めたいと思う。って言うか決める。」

命令口調ですかっ！？

「面白い決め方ってどんなのですか先生？」

まじめそうな生徒さんが手を上げて質問。

「そだな・・・じゃ、バトルロワイヤルで。」

イキナリ何言っちゃってんですか先生！？
教師なのに殺し合いとかしたらヤバイですよっ！？

「冗談だよ。本気にするな。」

いや会ったばかりでなんです、まったく冗談に聞こえませんか？

「バランスのとれたパーティにするために、死なない程度に試合かなんかしてもらおう。」

死なない程度って……。教師の言葉ですかっ！？

「魔法使っても、体術使ってもかまわんぞ」

なんでもアリですか？一応中等部だからかなり怪我する人とか出てくると思いますよ？

「安心しろ。ちゃんと学園長に許可とってあるから。」

って学園長っ！？

あんた何やってんですか！？

ニヤルガはこの学園の未来が心配になってきた。ついでに言つと自分の命も。

「はぁ……。俺やっぱり運超悪いわ……。」

隣を見るとユウキが頭を抱えている。

「ご、ご愁傷様です……。」

というわけで、3・1のクラスで「トーナメント戦」が行われることになった。

新学期早々こんなでいいのかっ!?

第3話 トーナメント・・・？（後書き）

作者（以下作）：ども。銀風です。

ニヤルガ（以下ニヤ）：ヤッホー、ニヤルガです。

作：そー言えばだけどニヤルガ？

ニヤ：ん？何？

作：何で小学校とか大学とかの教室知ってるの？

ニヤ：え……。そ、それは、異世界の友達がつ！

作：え！異世界に友達いるのっ！？すごっ！

ニヤ：そ、そうだよ。まあそこら辺は別にいいとして・・・

作：え？もうちよつと聞きたいんだけど・・・

ニヤ：こつ、これからこの小説をよろしくお願いしますっ！

作：え、ちよつと！

ニヤ：質問とかじゃんじゃん送ってくださいっ！直したほうがいいようなところとかも教えてくださいとありがたいですっ！

作：え。ちよつと何まとめようっ！？

ニヤ：でわ次の話でお会いしましょう！

作：ええーっ！？終わっちゃたのーっ！？

第4話 黒魔法・・・？

「次ミラの試合だよね？」

「んー確かそーだな・・・。」

ニヤルガとユウキは今レイニール学園の体育館にいる。

かなりの大きさで、東京ドームの半分くらいある。

本当に無駄に広い。

「ミラって何属性なの？」

属性とは、精霊魔法に関することで、精霊魔法というのは、普通の魔法は自分の魔力で魔法を使うのを精霊魔法は、精霊に魔力を貸してもらって行なう魔法のこと。

そしてその精霊には属性があって、火、水、地、風、闇、光、無の7種類。

そして属性ごとに性格が異^{こと}なっていて、その精霊に好かれないとその属性の精霊魔法は使えない。

「ミラは火属性だよ。まさに性格びつたりだからね・・・。」

火属性の精霊は気性が荒いことで有名だ。

「あはは・・・。確かにね・・・。」

そんなこんなで、体育館にミラが入ってきた。

「ユウキッ!!」

「んあ？何だ・・・ってどはあ!？」

ミラが完璧なフォームで投げた鞆^{かばん}がユウキの顔面に命中。

「おつし！命中！！」

ガッツポーズするミラ。

「まさにど真ん中！……ってふざけんじゃねえー！！！！」
完璧な乗り突っ込み

「いや、なんかあんたが私の悪口言ってるような気がして。」

「えええッ！？何で知ってるの！？エスパーツ！？」

「それよりも、それもってなさいよっ！」

人差し指をユウキに突きつけてミラが叫んだ。

「お、おう！」

なにもそんなことで砲投げなくてもいいのに……とか思うユウキ
でした

……

「えと……。ミラの対戦相手はキラ・グレイズ？誰だろ……。」

「えええ！？ちよっ！ニヤルガお前キラ知らねえのかよっ！？」

ポカンとするニヤルガ。

「キラっていつたら、実技魔法の成績トップだぞっ！？何で知らねえんだよ！？」

「実技魔法……。？……。ああ！」

ポンツと手を打つ。

「実技魔法は立ったまま寝てたからほとんど覚えてない。」

ええええええ！！！？？

「い、今までで一度も寝てなかったこと無いのかっ！？」

「うん。少なくとも、二年生の間あいだわ。」

筋金入りの無神経・・・？

・・・

「それでは、ミラ・フォスタVSキラ・グレイズ！始め！！」
ピーーッ！！
ホイッスルが鳴り響く。

「さて。始めようか？」
流し目するキラ。

・・・

「・・・。」

「アイツ成績はいいんだけど、ナルシストで・・・。」
なるほど・・・。人って完璧につくられないものなんですねえ・・・。

まあ確かに顔はカッコイイ方だろう。
金髪に青い目で見られたらメロメロに・・・なる女の子もいるの
だろう・・・たぶん。

・・・

「キモイのよッ!!ふざけんなッ!」
真正面から言っちゃったよ・・・ミラ。

「なっ!?!ひ、ひどい・・・。」

早くも精神ダメージ!?

「ったく・・・。殺^やるわよ?」
殺しちゃだめですよっ!?

「燃え盛れ火の粉よ!「ファイヤボール」!!」

ミラが唱えたのは簡易魔法で、普通ならろっそくに火を灯すぐらいの威力の物なのだが・・・。

ゴオオオオ!!

人一人くらい丸焼きにしまいそうなくらいの大きさの業火^{いっぴや}が現れた。

「なっ!?!」

さすがにキラも驚いている。

「うふふ。死にたくなかったら、ちゃんと防ぐことね?」

・・・

「・・・すごいですね・・・。」

「いや。実はアレ、ミラの欠点なんだよな・・・。」

「・・・?」

「ミラは、どんな魔法でも、黒魔法並みの攻撃力になってしまうんだ・
・・・。」

ちなみに黒魔法って言うのは、攻撃専用の魔法の種類のことです

「それって・・・。回復魔法も・・・?」

回復魔法って言うのはもちろん治癒とか。おもに、水属性や光属性
の分野

「・・・ああ。よく実験台にされた・・・。」

過去の傷が痛むのか、お腹をおさえて真っ青な顔になって言った。

ってことは傷をもっと広げ・・・考えるのやめよ・・・。

「」愁傷様です・・・。」

・・・。

「いつけえ」

軽く手を振って炎をキラに投げつけた。

「う、うわっ!!??つく、緩やかに流れる水よ、攻撃を防ぎまた
え!!「ウォーターシールド」!」

そのまんまの名前で水の盾。

中級魔法でかなりの硬度誇る……はずなのだが。

バシャーン！！

ミラの火の玉があたり、水の盾が蒸発した。

……

「わお。反則な威力じゃん。」

「……普通は火は水に弱いはずなんだけどな……？」

属性の法則で、火は水に弱い、水は風に弱い、風は地に弱い、地は火に弱くて、そして、光と闇はそれぞれ対極の位置にある。

ただそれはその属性同士の威力が同じだった場合の話。弱いほうでも、威力が高ければ強いほうを相殺できる。

「……ご愁傷様です……キラさん……。」

ニアルガがポツリとつぶやいた言葉は、虚しく中に消えてゆくのだつた……。

そしてキラ・グレイズは1ヶ月入院することになりましたとさ

第4話 黒魔法・・・？（後書き）

作：ども。銀風です。

ミラ（以下ミ）：ヤッホー！ミラよ！

作：ミラさん、どんな魔法でも黒魔法のようになってしまっって本当ですか？

ミ：え（汗）ま、まあそうなのかしら？

作：じゃあ、治癒魔法しようとしてユウキさんを殺しかけたってゆうのも本当ですか！？

ミ：うつ・・・。そ、それは・・・。ま、まあ失敗は成功の元ってことであ！

作：本当に元になってるんですかあ？

ミ：な、なってるわよ！って事で、これからもこの小説よろしくね！
作：・・・無理矢理だな・・・。

第5話 感電死・・・？

「いやあゝ。なんかすつきりしたわゝ」
爽快に笑っているのはもちろんミラ。

「相手弱すぎよねアレ。もっと手ごたえのある奴いないのかしら？」

「この学校には初級の魔法で敵を丸焦げにできる人はいないと思われます・・・。」

なぜか敬語のユウキ。

「んゝ。でもアイツほとんど抵抗してこないんだよ？ユウキだったらもうちょつと面白かったのに」

「・・・。それは俺のリアクションが面白いから、という風に受け取っていいのか？」

「あつたりまえ」

軽く落ち込むユウキ。

・・・

「ふあゝゝゝ。眠いなあゝゝ。」

大あくびをしているのはニヤルガ。

次はニヤルガの対戦なので体育館のど真ん中にいる。

「早く来ないかなあ・・・対戦相手。」

ニヤルガがこの場所に立ったのはつい1分前くらいなのだが、短気、というわけじゃなく

「めんどくさいからさっさと終わらせたいなあゝ・・・。」
とか思ってるからであった。

「お待たせしましたあ~~~~!!」
バンッ!

体育館の扉を大きな音を立てて開けて現れたのは、女の子。

茶色い髪を二つ結びにして活発そうな短いローブを着ている。
それとは裏腹に、たれ気味の緑の目が印象的だ。

・・・

「あ。ニヤルガの対戦相手はあの子かあ。ユウキ知ってる?」

「ああ、アイツは確かウィル・パマニーだよ。ってか去年同じクラスだったろ?」

「え?・・・ア、アハハハ」

視線を逸らすミラ。

「・・・。はあ。ミラっていつも人の顔おぼえないよな・・・。」
「うぐつ。」

こればかりは言い返せないミラでした

・・・

「ウィル・パマニーVSニヤルガ・ミュウ・ラビネス!始めっ!」
ピーーーッ!!

ホイッスルが体育館に鳴り響く。

「よろしく。」

呑気に挨拶するニアルガ。

「容赦しませんよっ！古より吹く風よ！わが意のままに舞え！〔ウインドカッター〕！」

ウィルの手のひらから見えない刃が放たれる。

「んー。でい。」

気のない声でニアルガは手を前に突き出す。

それだけで、刃が相殺された。

「なっ！？無音魔法っ！？」

無音魔法とは、魔法の使い方の種類で、

通常は詠唱魔法で普通に呪文を唱える方法。

次に短縮魔法。これは難易度が高くて、呪文の『鍵』となる部分を唱える、という物だ。ただし、呪文を省略する代わりに威力が三分の一になってしまう。

そして最後に無音魔法。

これは短縮魔法より難しく、何も唱えずに魔法を発動させるというものだ。

もともと魔法というのは、イメージで発動させるものだから、呪文は要らないのだが、それは理論上の話。本当にやるにはすごい精神力がいるのだ。

実際にそれができるものは、この学校には1、2人くらいしかいないだろう。

「風の魔法かぁ。えっと、苦手なのは、地だっけ？うん……。じゃあ、えいっ！」

ニアルガは人差し指をウィルの立っている地面に向けた。

そのとたん、ウィルは、その場から動けなくなった。

「なっ！？この魔法は上級魔法のはずよっ！？」

ニヤルガの使った魔法は、地の上級魔法の「マッドハンド」というもので、そのまんま訳して、泥の手。

ニヤルガの位置からは見えないが、おそらくウィルは泥の手に足をつかまれているだろう。

「えーと、相手が気絶または戦闘不能になったら試合終了だっけ？どーしよっかなコレ。」

・・・

「あーもう！！どうなってんのか分かんないじゃないっ！」

「うーん・・・。おそらく地系の魔法で足止めしてるんじゃないかな？」

「・・・なんで分かるのよ・・・。」

なんかジト目でユウキを見てきたミラ。

「（顔怖いつて・・・。）なんかウィル、地面に固定されてるみたいだ、と思ったからな。」

「地面に固定つて・・・。この体育館、石でできてんのよ？」

そう。この体育館は石でできている。それも、ここへんでしか取れないダイヤモンド並みに硬い石で。

「だからこそだ。この石は特殊で、地の性質を持つてるんだぜ？前授業でやったと思うけど？」

「え。う、嘘そんなの全然・・・ハッ！い、いや知、知ってたわよっ！？」

・・・。はあ、ミラあの授業寝てたな・・・。

ちなみに地の性質とは・・・。

物にはすべて性質があつて、それは精霊の属性と同じく7種類。その物は、その物の属性に反応するようになって、例えば火の性質の物を燃やしたりすると普通の何倍もの燃え上がり方をする、といった感じ。

だからニヤルガは地の属性魔法を石に向かって簡単に使えた、というわけ。

だけど普通は、石を泥に変えたりすると魔力の使いすぎで倒れるけど・・・。

・・・

「ねえ。ウィルさん。」

「何よっ？つてゆうか何捕まえてる相手に悠長に話しかけてんのよっ！」

・・・うわあゝこの人苦手なタイプだあ・・・。

「棄権してもらえませんか？」

「はあ！？」

呆れた声を出すウィル。

「戦闘不能にするのは簡単ですけど・・・めんどいし？」

あなたはやつぱりそれですか？

「あきらめないわよっ私は！パーティって結構重要だし、何より・・・」

かつこいいところ見せるチャンスじゃないっ！

「……。（ハア……。この人見栄っ張りなのかな……。？）」
とりあえず、あきらめる気が無いことだけは分かった。

「そういうことなら、手加減しないよ？」
スツと手を上げる。

「な、何する気よ!？」

「何って……」

殺す気？

「おおおーい!? 殺すなよっ!？」

遠いところから、ユウキのツツコミが聞こえた気がしなくてもないが、無視する。

「手加減しなかったら殺すって、どんな思考回路よっ!？」

今度は、目の前からのツツコミ。

「ええゝ。だつて生かして倒すってキツインだよ？」

知らねえよ！

「んじやゝゝ……。生き埋めは？」

どっちにしる死ぬだろツ!？」

とか、天の声が聞こえたような気がしたが、やっぱ無視。

「じゃ、窒息死。」

もう名前に「死」ついてるから！死んじやつてるからっ!？」

「ええゝ？他は焼死と溺死くらいしか知らないなあゝ」

結局殺す気なのっ!？」

「あ。あと、感電死があつたなゝ」

や、やりかねんよこの人……。電気とおってないこの場所で感電死くらいやりそうだよ……。！

「……棄権します……。うう……。」

無表情、もしくは楽しそうな顔で自分の死について語られたら誰でも棄権するだろう。

「むう。途中で意志を曲げるのはよくないぞ。」

やや残念そうな声でニヤルガがそういったのは言うまでも無い。

ちなみにウィルは精神科に1ヶ月ほど通うことになったとさ

第5話 感電死・・・？（後書き）

作：ども。銀風です。

ユウキ（以下ユ）：俺はユウキだ。

作：フツ、ユウキ君。君の事はいろいろ聞いてるよ？

ユ：どんな風に？

作：男の癖にミラに頭が上がらないとか・・・。

ユ：オイオイオイッ！？誰だよそんな事言ってたの？

作：・・・異世界の友達？

ユ：誰だよっ！？そんな奴いんのかよ！

つてかそれニヤルガの言い訳じゃねえか！！

作：むう・・・。60点。

ユ：何がだよ！

作：んゝ・・・ツツコミ？

私から言わせてもらえばもう少し短く・・・

ユ：言わんでいいわ！

作：む・・・。次はもつといいツツコミを頼むぞ。

唯一のツツコミ君。

ユ：はあ・・・。ものすごく疲れそうな予感が・・・。

作：では、また次のお話で会いましょう

ユ：え！？終わり！？なんか俺作者にもいじられ・・・！？

第6話　しゃべる剣・・・？

「ふう〜。めんどくさかったけど面白かったなあ〜」

「・・・。つ、次はユウキの戦いよっ！！」

「そっか〜。ユウキの特技ってなに？」

「特技はね・・・。アイツらしからぬ感じで、『魔法剣術』なのよ。ま、私に勝てないくらい弱々『よわよわ』だけどねえ〜」。

『魔法剣術』とは・・・。

そのまんまで魔法と剣術が合わさったもの。

おもに剣に魔法をまとうせて使う。（炎をまとうせたり、電気をまとうせたりetc・・・。）

この『魔法剣術』用に開発された『魔剣』というものもあって、それぞれ違う属性を持っていて、水だったり火だったりする。

この『魔剣』を用いることによって、魔法を使えない人でも『魔法剣術』が使えるようになった。（ちなみに『魔剣』を開発したのもこの学園長のトム・アルベルトだ。）

そしてここレイニール学園では、魔法剣（普通はこういう風に略す）の授業も行なっていて、魔法を使えなくとも、魔剣を持っている人なら学園に入学できることになっている。

「ユウキって魔法使えないの？」

「ん？一応使えるわよ。い・ち・お・う、だけどね。」

「一応って・・・。何か普通じゃないところも？」

「そーよっ！アイツ、黒魔法は一切使えないのよっ！？弱すぎっ！相手になんないわっ！まったく、回復魔法とかしか使えなくて攻撃

は魔剣に頼りつきりでさっ！」

「・・・。」

黒魔法しか使えないあなたに言われても・・・。

「まあ、いいコンビなんじゃないの？」

ニアルガのこの声は、都合よくミラには聞こえなかったようだ。

・・・。

「あゝ。勝てるかなゝ。」

肩に抜き身の剣を持ち、独り言を言うユウキ。

『勝てるに決まってんだろーが！まったく、おまえはいつつも弱気だな。』

声がした。

ユウキの頭の中で。

これは、ミロのテレパシーと同じもので、そしてコレを使ったのは

「うっ。手厳しいな、グレゴールは。」

『はっ。俺を作った奴に言えよ。魔剣は作った奴の性格が写されるんだからな。』

そう。テレパシーを使ったのはユウキの持つ剣。

柄に“グレゴール”と彫られている。おそらく剣の名前だろう。

「それにしても、魔剣ってしゃべるんだなゝ。」

『ああ。よっぽどへたなやつが作らなけりゃみんなしゃべるさ。俺

の喋りが流暢リキウチャウなのは、作ったやつがものすごい腕だったからなんだぜ。』

「ふーん。そーいやだけどグレゴールって誰が作ったんだ？」

『へっ。そりゃー言えねえぜ。作られたとき、そう約束させられたからな。破ったらまた鉄の塊に戻されちまうぜ。』

「・・・。（そんな恐ろしい人なのか・・・？）」

『おっと。相手のお出ませ。』

グレゴールはそう言った。

そして、体育館の入り口から入ってきたのは・・・。

「なっ!？」

『「爺さんじゃねえか!!」』

・・・

「アレが対戦相手かぁ・・・。見たこと無い爺さんね。普通老人だつたら結構顔が知れてるはずなんだけど・・・。」

「飛び級とかしたんじゃないの？」

ここの学園は入学試験をいつ受けてもいいので、お爺さんが今年入学試験を受けて、飛び級してこの学年にいるかもしれないからだ。

ニヤルガは自分がそうだったため（？）、ミラにそう聞いてみた。

「はぁ・・・。なに言ってるんのニヤルガ？飛び級だったらもつと有名よ？なにせ、飛び級なんてここ百年ないんだから。というか、飛び級とかむかつくわよね。年下の癖に私達と同じくらいの実力なんて。まあ、年下じゃないときもあるけど、もし同じクラスになったら・・・我慢できないかもね。」

黒い笑みを浮かべるミラ。（鬼の形相とはまさにこの事）

「うわゝゝ。そうなんだ・・・。（ば、ばれたら殺されるっ!?!）

」

「だけどねゝゝ。さすがにユウキでもあんな爺さんに負けないわよ。杖ついてるし。」

確かに入り口から入ってきたお爺さんはふらふらしながら杖で前に歩いている。

「楽勝ね。うん。」

「いや、そうはいかなさそうだよ?」

「・・・?」

ニヤルガは、面白そうに笑った。

「ユウキはどういう風に対応するのかな?」

・・・

「ユウキ・フィステルVSレイ・バスター。始め!」
ピーーーーーッ!とホイッスルが鳴り響く。

『よっしゃ、いくぜ相棒!』

「お、おう!」

ユウキは、銀色に輝くグレゴールを構えなおした。

「ふお、ふお、ふお。魔法剣術使いかの? なら、わしも魔法剣でお相手するでしょう。」

おじいさん・・・いや、レイはどこからか黒い刀を取り出した。柄も、鞘も、黒く輝いている。

柄には、“セルリック”と彫られていた。(ちなみにユウキの視力は1.9。本の読み過ぎで下がったんだとか。)

レイはセルリックを抜いた。

予想通り、刀身も黒く光っていた。

「爺さんも魔法剣使いか?」

「ふお、ふお、ふお。そのようなものじゃ。」

・・・いまだき「ふお、ふお、ふお」は古いよな・・・。

「さて、いくかの。」

『相棒! 行くぞ!』

キーン!!

一瞬で間合いをつめたレイが剣を振る。

「危なっ!! 当たったらどうするんだよ!!」

グレゴールで防ぎながら文句を言う。

「まあ、当たったら葬式ぐらいはしてやろうかの?」

「殺す気がよっ!! あくまでパーティ決めだぞっ!?!」

笑顔で言っのけたレイに突っ込むユウキ。

・・・

「・・・結構やるわね？あの爺さん。」

「ユウキの苗字ってフィステルって言うんだっ！知らなかったよッ！？っていうか教えてもらってなかったよね！！」

「ってソコッ！！？？」

・・・。

「（っは！！いけない、いけない・・・。私はボケなのに突っ込んでしまったよ・・・。）」

「・・・まあ、なんかこの勝負決まったようなもんだね。うん。」

腕組をして急に真面目に話し始めたニヤルガ。

「決まったって？見たところ互角だけど・・・。」

「・・・ま。見てたら分かるよ。」

・・・

「ぐっ！おわっ！？どひゃあー！」

『攻撃受けるたびに変な声だしてんじゃねえよ！！さっさとこっちからも攻めろ！！』

剣に怒られるユウキ。・・・なんか、かわいそ。

「ふお、ふお。まだまだじゃの、青年。」

超激しい動きをしてるのに余裕で、息ひとつ切らしてないレイ。

「ば、化け物かよアンタ!!」

カーン!

「経験の差じゃよ。青年。」

ガキーン!

「俺は、青年じゃなく、ユウキだあ!!」

キーン!

「ふむ。なかなかやりおるの。……だが」

「どわっ!」

くるくると、綺麗に回転し、地面に刺さるグレゴール。

『だあー! てめ、何手え放してんだよ! 馬鹿!』

剣にまで馬鹿といわれるユウキ。……哀れ。^{あわ}

……

「ほら、もう勝負決まっちゃったじゃん。」

「うつわ、あんな爺さんに負けるなんて!! あつの馬鹿ユウキ! 帰ってきたらぶつ飛ばしてやる!」

早くも殺気を撒き散らすミラに、まあまあとなだめるニヤルガ。

……年下に止められるって……年上としてどうよ?

「負けるのも当たり前だよ。だって、あのお爺さん……。」

「え? あのお爺さんがどうかしたの?」

落ちていたミラが不思議そうにニヤルガに聞く。

「あはは。次あの人とあたるといいな 楽しそう」

答えになってない・・・。

「こ、怖いわよニヤルガ・・・？」

ミラをも怖がらせるニヤルガは、ある意味最強かもです

第6話　しゃべる剣・・・？　（後書き）

作：ども、銀風です

レイ（以下レ）：始めましてじゃ、レイと言う。

作：さて、早速ですが、お詫びします。遅れてすみませんでした！

レ：ふむ、遅れた理由がまともだったら許してやってもいいのだが
のう・・・。

作：って、何初登場の君がえらそうにしてるのさ！

レ：ふつ、休みの間ずっとゲ・・・

作：どわー！！！！言うなあー！！！！言ったら読者減るだろー！！？

レ：自己責任。

作：え、何それ！？自己責任って、自分の責任だけだよね！？

レ：このキャラを作った自分が悪い。

作：ひど！・・・ふん、もういいもん！（涙目）次回レイの設定を
で　　って事にしてやるもん！

レ：なぬ！？そ、それは勘弁していただきたい・・・

作：ニヤハハハハ！じゃあ、読者の皆さん。次回お楽しみにいゝゝゝ
）

レ：ええええ！

第7話 変装・・・？

「……………」

「ツたく何なのよあいつら！！ふざけんじゃないわよ！！」

「……………」

「こういうところで棄権しやがってえ！！！」

「……………」

「私にとってはストレス発散のいいところなのに、余計にストレスたまったじゃないのぉ！！」

「……………はあ……………」

ずっと愚痴を言っているのは、もちろん、ミラ。

愚痴を言っている理由は、ミラの次の対戦相手が棄権したから。誰でも前の対戦相手を丸焦げにした人とは戦いたくないだろう。

賢明な判断だ、とユウキは思っているのだが……………ミラはそうじゃないらしく、ずっと文句を言い続けている。

「ミラ……………そろそろ文句言つのやめろよ……………」

「はん！何よ！老人に負けたくせに……………べーっだ！」

「何を！？いまどき「あっかんべー」なんてしてる幼稚な奴に言われたかねえよ！！」

「なによ！黒魔法使えないくせに！」

「なんだと！黒魔法しか使えないくせに！」

「この軟弱男！」

「この軟弱男！」

「この暴力女！」

バチバチバチッ！

……という効果音が出そうなくらいの勢いでにらみ合うミラとユウキ。

「やるの!？」

「やんのか!？」

ミラは右手を上げ、ユウキは背中にしよっているグレゴールに手を伸ばす。

止める人^{ニヤルガ}がい^{ニヤルガ}ないこの二人が、喧嘩を始めようとしたそのとき。

『ちょっとやめてくださいよ。こんな所で喧嘩なんてされたら、ご主人の試合が見れないじゃないですかあ。』

恐ろしくて、誰も声をかけなかったこの二人に、声をかけた人がいた。

いや、人じゃなく『狐』がいた。

「き、狐?」

今まで喧嘩していたことも忘れ、啞然とする二人。

『はい。狐ですよ。』

あっさりと答えた、白い狐。

久しぶりの登場の、ミロでした。

・
・
・
・
・

「次の試合は、あのレイって言う人となんだよね〜」
いつになく上機嫌なニヤルガ。

「あは。自分で言うのもなんだけど、ちょっとキャラ崩れてきた〜。
・
・
・
・
いや、最初から崩れてたのか？」
はい。多分そうです。

「ふむ。次の相手はあんたかの？」

いつの間にかニヤルガの正面に、レイが立っていた。・
・
・
・
瞬
間移動？

「うん。そだよ。よろしくお願いねっ！」

動じることなく、嬉しそうに笑いながらニヤルガは言った。

・
・
・
・
・

「「悪霊退散ーーーーッ!!!!」」

『ええ！？イキナリってひどいですよ！？か弱い狐にッ!!』

現在の状況は、

ミラが雷をミロに放とうとしていて、

ユウキが剣を抜いてミロに切りかかるうとしていて、

ミロが二人に文句を言っていて、

周りの人達がドン引きしながら見ないふりをしているといったところで。

「どこがか弱い狐だよ！……！！！」

「どう見ても悪魔にしか見えないわッ！！」

『ええ！？ひどいよ！？「狐」悪魔」って狐と悪魔に対する最大の侮辱だよ！？』

何気に悪魔の心配までしちゃってるミロ。

『ちょっと、話聞いてくださいよう。ユウキさん、ミラさん。』

「へ？」

「な……なんで私達の名前知ってるのよ！？」

・・・

「ニアルガ・ミュウ・ラビネスVSレイ・バスター、始めッ！」
ピーーーッ！

こちらでは、戦闘（？）中のミロ達とは関係なく、ニアルガとレイの試合が始まっていた。

ちゃんと見られなくて残念でしたな、ミロさん。

「えっと、試合する前にやることあるよね？」

相変わらず、見た目に似合わないしゃべり方、しかも緊張感0で対戦相手に話しかけるニアルガ。

「やること？ わしにはまったく心当たりが無いが。」

こちらにもまったく緊張感なしに話すレイ。

「何いってんのさ。『お兄さん』？」

不敵に笑いながら、「レイに向かって」そう言った。

「・・・ほう？ 何故そう言う？」

先ほどの緊張感のまったくない雰囲気から一転、張り詰めた空気。ニアルガは、その中でも一切顔色を変えず話し続ける。

「『お兄さん』、変装するならもっと徹底的にやらなきゃ。・・・
・・・私みたいに、ね。」

含み笑い、というヤツをするニアルガ。

さっきからずっと笑っている。不気味だ。

「やっぱりか。なんとなくそんな気はしてたけどなあ・・・。でも

よく分かったな？俺が、

『変装中』で、しかも『若い男』だって。」

レイは、老人の姿からはまったく似合わない（ニヤルガ以上）若い男の声で話し始めた。

「うん。けっこー完璧な変装だったよう？ただし、欠点が3つあったんだあ。」

「ふーん。今後の参考のために聞いておこう。」

完全に、試合のこと忘れてる二人であった

。

・・・

「「使い魔あ！？」」

『ハイ。かれこれ3年になりますかねえ・・・』

今の状況は、

何でミロがユウキたちの名前を知っていたのか、ミラが問い詰めてミロが少々昔話も混ぜながら（ミロだけ）楽しく説明を終えたところであった。

「つ、使い魔って上級魔術師にしか仕えないって言うヤツか！？」

ここで使い魔について説明しよう！

使い魔というのは本来『魔界』という所から、『魔物』を呼び出し自分に従わせる物である。

しかし最近では『妖精界』という所から、『妖精』を呼び出すこともできるようになり、

使い魔は『妖精』と『魔物』の二種類に分別されるようになった。

しかし『妖精』も『魔物』も、呼び出すのにものすごい魔力が必要でそれを従わせるのにもかなりの魔力がいる。

だから上級魔術師にしか使い魔は従わせられないといわれている。ちなみに上級魔術師というのは、上級呪文を500以上覚えた魔法使いに与えられる称号だ。

『その使い魔です』

「え、ええええ！！？？じゃあニヤルガって上級魔術師だったのぉ！？」

『いえ、違いますよ？昔、「称号を与えようか？」って王様に言われたけどニヤルガが断ったんです。』

何気にすごいことだったミロ。

「お、王様あ！？」

「ニヤルガってそんなにすごい人だったんだッ！うわバイよ、思いつきりタメ口で話してたよッ！？」

今更な事言ってるミラ。もうどうしようもありません。

『確かにすごいかもですね。私以外にもう一匹使い魔いるし。』
またまた衝撃発言。

二人は口をパクパク、酸欠の金魚のようにやっています。
驚きで声も出ないらしいです。

『あ！！もう試合始まつてる！？しまったあ！！』
気づくの遅すぎな三口でした

・・・

「まず、一つ目。」

「・・・。それよりもそのホワイトボードはどこから出した。」

ニアルガの隣にはホワイトボード。手には指つきの棒。
ご丁寧にめがねまでかけてる。しかも似合ってるし。

「企業秘密？」

「どこのだ。しかもこっちに聞くな。」

ニアルガの前に立っているのは、先ほどまでの老人じゃなく変装を
といた状態のレイだった。

黒髪に黒目、長身で、一言で言うなら「イケメン」。
ずっと無表情なのが玉に瑕だが。

と、いうかお爺さんがいきなりお兄さんに変わったのに誰も気づい
てないし。

三口達のおかげか。

「気にしない気にしない！さて一つ目。心当たりはありますか？
レイ君。」

美人教師が意外といたについてるニヤルガ。

「……俺的には完璧だと思ってたからなあ。分からん。」

「一つ目はね。『体力』だよ 普通のお爺さんはあんなに体力無いもん。」

ニヤルガが言っているのはユウキと戦ったときのことだ。
けっこう長時間戦ったのに汗ひとつかかず、息も切らさなかった。

「え。そうなのか！？じゃ、うちのじーさんヤベーな……。90
歳の癖に指たて伏せやってるんだが……。」

うん。類は友を呼ぶってよく言うよね
あ。この場合蛙の子は蛙かな

「そして2つ目！！今時お爺さんは「ふお、ふお、ふお」なんて言
わない！！

コレ重要だよ！言ったら演技だから！」

そんなことを真面目顔でいうニヤルガはすごいんだかすごくないんだか分からない。

「うわ。やっぱりうちの爺さん参考にしたらミスったのか……。」「

レイのお爺さんは指たて伏せをして「ふお、ふお、ふお」なんてい

う人なんだね。どんなだ。

「そして最後のひとつ。『セルリックはフライツ家の家宝だから。』でしょ？『 그레이さん』。フ란ツ家では、次期当主にしか渡さないもんね〜」

さつきと同じ不敵な笑みを浮かべてレイ…… 그레이？にウインクをする。

『セルリック』とは、レイが持っていた黒い刀のことだ。

「！そこまでバレてるとはな……。視力いいなお前。」

いや、10mくらい離れてて、剣に刻まれた文字読めたらもはや化け物だよ？

ユウキでもすごいのに。

「いや〜。文字もちゃんと読めたけど（え。）会話が聞こえたからさ〜？次期当主ならちゃんとバリアはつとかなないと、ダメだよん？もうキャラ崩れすぎ。」

「！！お前、『会話』が聞こえるのか？」

「うん。」

『会話』というのは使い魔とのテレパシーと同じような、剣とのテレパシーの会話のことである。

普通は、持ち主、《契約者》にしか聞こえないものです。

「「うん」って……。軽いノリだな……。」

なかば呆れ気味で言う 그레이。

「え。じゃあ、「そうだぜ！」？」

「いや、余計軽いからな？」

無表情でツツコミを入れるグレイさん。

良かった！

この人ちよつと天然で世間知らずなところあるけど（え！？）ニヤル
ガ達よりはまともだ！

しかも数少ない突っ込み役だ！

「あーそーいや試合中だったね」

「あ。」

今頃気づいたのか、あんたら。

第7話 変装・・・？（後書き）

作：ども。銀風です。

グレイ（以下グ）：ふむ。新キャラに近い、レイことグレイだ。

作：にはは 面白い展開になったよね

グ：・・・ああ。俺のキャラが世間知らずで天然って事に・・・！

作：ケツ。ざまー見やがれ あ。でも、これからはグレイじゃなく
レイって事で通すからね。

レ：・・・これでフライツ家の次期当主ってばれたら爺いに殺さ
れるう！！

作：じゃあ、その前にもっとおじいさんのキャラを強くしないとね
レ：くっ！テメエ、前のあとがきの時とキャラが違うぞ！？

作：ふっ。残念だったな。この俺は多重人格者だ！！

レ：何が残念なのかわかんねえよ！？

作：でわ、次回の作者のキャラにご注目ッ

レ：したくねえ！？

説明会 今更だけど・・・？（前書き）

私にしてはめっちゃ早い更新です！

新記録です！

だけどそのかわり次が遅くなるかもです！

説明会 今更だけど・・・？

作：ども。銀風です

今日は今さらですけど、登場人物や、世界観の紹介をしたいと思います
ま・・・

ミ：ちよつとお！何なのよここは！！

ユ：すつげえ！さつきまで学園いたのに・・・。

作：ちよつと・・・。話の途中なのに遮らないでよ・・・。凹むよ？

二：あ。作者じゃん。なんなのさ、急にこんなところ呼び出してさあ。

レ：うむ。こんなの書いてる暇あったら本編書け。

作：にやはあ！？・・・い、イキナリひどいよ・・・レイ・・・。

ミ：あ！ちよつと作者！！イキナリ何よ！！寝起きだったのよ！？
髪の設定の途中だったんだからあ！！

ユ：・・・にしても作者・・・。その格好なんだよ？不審者か？

（作者の格好はご想像にお任せします）

二：・・・はあ。このめっちゃ濃いキャラが全員集まったらこうなるに決まってるじゃん。

レ：人のこと言えんだろ。

作：むう！とりあえず、人物紹介から行くよ！！ちゃんと見てろ！

ミ：ちよつと作者、話聞いてんの！？

作：では、行っきまゝす

・・・

ニヤルガ・ミユウ・ラビネス

主人公。13歳。

性格：めんどくさがり。

主な武器：オールマイティ。でもよく使うのは、剣で二刀流。

容姿：銀髪。オッドアイ。右が青で、左が緑。

この格好のときは、主に銀の服を着たりしている。

実は常に右手にドラゴン革の指だし手袋をつけている。理由はおそらく次の話で。

学園用の変装のとき。：漆黒の髪をボニーテールにっていて、身長は180。

この格好のときは主に黒い服を着ている。

目は深紅。

特技：何でも。できないことは無いといっても過言ではない（笑）

苦手なもの：なし。でもあえていうならば、熱血漢。
コンプレックス：普通の姿でいると、実年齢より低く見えること。
備考：実は右の青い目には隠された秘密があります。

．．．．．

二：何コレ。

作：ほら、この小説は主人公が最強だからさあ。

ミ：ねえ、変装って何．．．

作：さて、次行きましょう

．．．．．

ミラ・フォスタ

ヒロイン（？） 18歳。

性格：負けず嫌い。短気。

主な武器：なし。この先杖が出てくるかも？

容姿：赤髪。ストレートで、長さは肩よりちょっと長いくらい。

身長は170cm。服はいつもボーイッシュでおしゃれなものを着

ている。

特技：魔法をすべて黒魔法並の威力にできる（笑）

苦手なもの：猫。

コンプレックス：なし！

備考：実は好きな人が・・・キャハッ

・・・

ミ：ヒロイン（？）って何よッ！？正真正銘のヒロインよッ！？

ユ：ってか特技じゃないだろ、アレ。

二：「キャハッ」って・・・キモ。

レ：同意。

作：なッ！？ひどいな！？

ユ：うゝん・・・。作者の性別が余計に分らなくなったな？前、自分のこと「俺」って言ってただろ？

レ：確かにな。その・・・変な格好じゃ、顔見えないしな・・・。

（改めて作者の格好を見るレイ。）

作：ふむ？プロフィールには書いていないが、俺は一応女だぞ？

ユ：ええええ！？マジかよッ！？

ミ：女の子だったの！？

二：「俺」は、やめたほうがいいと思うけど・・・？

作：む？学校でも俺つつつてるぞ？

ユ：うつわ。絶対兄弟に男いるだろ？

作：いるぜ 俺に似てイケメンな兄貴がな

レ：自分で言うなよ？

作：さて。話がむちゃくちゃそれだな 次行ってみよー。

・・・

ユウキ・フィステル

ヘタレ。一応突っ込み。 18歳。

性格：弱虫。

主な武器：グレゴール。友達でもあります。

容姿：黒髪。肩にかかるかかからないか、微妙なところ。

身長は170cmくらい。服はいつもミラに選んでもらったもの

特技：細かい作業。手先だけは器用です

苦手なもの：幽霊

コンプレックス：身長がミラと同じくらいなところ。

備考：いじられキャラだから、体だけは丈夫（笑）
東洋人だけど、名前は思いっきり西洋。それは、お父さんが西洋人だから

・・・

ユ：かなり悪意が感じられるんですけどっ！？

ニ：へえ。服はミラに選んでもらってるんだあ（ニヤニヤ）

レ：手先「だけ」は器用とか言われてるな。（クククッ）

ミ：あ、あんたいまだに幽霊苦手だったんだ……。 （プッ）

ユ：な、なんで皆笑ってんだよ！？ひ、ひどい……。

全（ユウキ以外）：いじられキャラでヘタレだから。

ユ：うわぁ~~~~ん!!!!!!

（泣き叫びながら退場。ケケッ）

作：さて。次はレイの番

レ：む。やつとか？

・・・

レイ・バスター（グレイ・フ란ツ）

突っ込み。18歳。

性格：天然。世間知らず。冷静だけど時たま取り乱します

主な武器：セルリック。魔法もかなり使えます。

容姿：黒髪。長さは肩より10cmほど長くて、1つに結んでる。

身長は180cmくらい。服は適当。最近まではいつもボロボロの服を着ていたが、変装をといたため、女の子のファンが急増。服をプレゼントしてもらったりしているので、派手じゃない限りは着ている。カッコイ〜

特技：ジャンプ力。垂直で跳んでも、2mくらい飛び上がれます。もう化け物です

苦手なもの：お酒。（ここには未成年という言葉は存在しないのだ）

コンプレックス：強さ。今でも十分強いんだけど、さらに上を目指したいんだってさ。カッコイ〜

備考：フ란ツ家の次期当主だが、わけあってレイニール学園にいます。

・・・

レ：「カッコイ〜」のところにかなり悪意が感じられるんだが・・・

作：うん 今の俺はSな性格だからなッ

二：自慢げに言うな。キシヨイ。

三：その・・・格好でいうと、余計にね・・・。

（改めて作者の格好を見るミラ。）

作：むう。俺の本当の顔見たらそんなこといえんぞ？自分で言うのもなんだが、俺は可愛いからなッ

レ：・・・でも、性格がな・・・。

二：うん。多重人格のトコはかなり痛いと思うよ。

三：ちょっと変人なトコもね。

作：うわお。きつびしい。

レ：しかし、4人の説明だけでこんな量になるとは・・・。

二：おそるべし、作者。

作：あはっ 次は、この世界の紹介するよお。

・・・

「銀の魔法使い。」の世界観の説明。

ニヤルガ達のいる世界は、通称「ヒールウエル」。

地球のように丸い形じゃなく、跳び箱みたいな形してます。

普通に魔法があつて、精霊や、魔物が普通に存在するところ。

・・・

二：ずいぶん大雑把だね？

作：何か説明してほしいことがある奴は、コメントをよこせ そし
たら付け足してやる。

レ：ずいぶん上から目線だな。

作：うむ。なにせ、最近やっと読者が1000人を越えた。

ミ：良かったじゃない。

二：ってか、それとこれとに、何の関係が？

作：1000人も読んでくせに、俺のリア友しかコメントをくれ
ん！悲しいぞ、俺は！！

（しらゝとした目で作者を見つめるニヤルガ達。）

作：と、いうわけで、なんでもいいんでコメントをおくれ。

二：・・・こんな作者は放っておいて、次は魔物の説明です。

作：ひどいなッ！？

・・・

『魔物』

魔界にいる生き物全般。

ほとんどがグロイ姿をしています。時には人型も。

普段は魔界から出てこないけど、時たま現れる『時空の歪』じくうのひようみからヒールウエルに侵入してくることがある。

侵入してくる理由は、主に人を喰うため。なんか、オレンジと蜂蜜と、林檎と桃とパイナップルが全部合わさった味がするらしいです、人って。

・・・

レ：なんだ、最後の説明。

二：何って、人のおいしさの説明だけど．．．。

ミ：いらなッ！？ってか誰に聞いたのさッ！？

二：魔王。

(ミ&レ)：すごいなッ！？

作：魔王かあゝ。かれこれ8人くらいに会ったな。

(ミ&レ)：あんたもか！？

作：じゃ、続いてニヤルガ、妖精の説明どぞ。

二：はあい。

．．．．

『妖精』

妖精界にいる生き物全般。

かわいい人型から、気持ち悪い河童みたいなまでいます。
あ、ちなみにミロは人型だよ。河童とかキモイし。

人型の妖精は基本的に魔力が強い。
ミロも強いよん。

羽生えてる奴とかいるけど、残念ながらミロは生えてないんだあ。
でも本人は「コレでも妖精界一の美少女で、一番強いんですよ！
？それに妖精王ですし！・・・あ。言っちゃった。」って言ってた
けどね。

・・・

ミ：妖精王ツ！？ミロって妖精王なわけえ！？

レ：初耳。

ニ：妖精王って何？

(ミ&レ)：知らないのかよッ！？

ニ：うん

作：でわ、妖精王の説明、どぞ

・・・

『妖精王』

妖精界の王様。

というか、妖精界で一番強いやつで全部で7人。いや、匹？

何故7人なのかは、簡単

属性が7つあるから。

ちなみに火、水、地、風、闇、光、無の7種類だよん

この王様達は、めっちゃ強なので普通は国単位で契約してます。つまり、ミロはすごい異例なのです。

・・・

ミロ：何かこの言い方ものすごいムカつくんですけどっ！？

二：あ。ミロ。意外とすごかったんだねッ

レ：意外とどころじゃないがな。

ミロ：そですよ！・・・うう。でもですねえ・・・。

ミ：でも何よ？

ミロ：ご主人に仕えてるもう一人の方が地位的には私よりすごいんですよ……。

ミ：そんなすごいのか？ってか妖精王よりすごいって……何者よ？

作：それは次回で 安心しろ、多分出てくるから

????：オイ！多分って何だよッ！？

レ：あ。増えてるし。

ミ：い、いつの間に……。

????：たぶんじゃなくて、絶対だろうがこの野郎！！

作：俺は気分屋だ！！

????：自慢げにいうなあ！！

作：ケツ。使い魔の分際で……。

レ：何だ、ニヤルガの使い魔か？

ミ：見たところ、その様ね……。

ミロ：あああ！！なにニヤルガに馴れ馴れしくしてるんですかあ！？

????：あん？妖精王が何のようだあ？

ニ：あ。ミロ、今さ、遊んで・・・

(ミロ&????)：ねえよ！！ 無いです！！

ニ：うわあ・・・。見事なハモリ・・・。

ミロ：大体、お前はニヤルガにデレデレし過ぎなんですよ！！

????：ああん！？テメエが羨ましいだけだろうが！！

ニ：・・・？何で争ってんの？

レ：鈍感、だな・・・。

ミ：鈍感、ね・・・。

作：このニヤルガの使い魔は、次回登場します！！つまりコレは前置きです！

レ：長かったな・・・。

ミ：長かったわね・・・。

作：でわ、また次回

(ミロ&???): 終わるかよ(ですか)！？

説明会 今更だけど・・・？（後書き）

レ：何か最後まで後書き的なノリだったな。

作：そうだけ

レ：・・・ウゼエ。

作：ひどいな！？

レ：俺はこれから予定があるからな。さっさと切り上げるぞ。

作：むふふ。予定って・・・お爺ちゃんに殺されないようにするための特訓でしょ？

レ：うお！？何で知ってたんだよ！？

作：凶 星、だったみたいだね

レ：・・・チイ。

作：行儀悪いぞ。

レ：今日の後書きはここまで また次回 （棒読み）

・・・ってことで、さらばだ。

作：ってあ！逃げんなあ！

第8話 王様が2人・・・？（前書き）

キャハ

今日はうるうる年にしかない日ですね

そして今日誕生日な人！

うらやましいです！

超若いじゃん！

「私はまだ3歳よ」

といか言ってみたくありません？

第8話 王様が2人・・・？

「よし！レイ、賭けしようよ！」

「・・・何だ、急に。」

試合をすることをすっかり忘れていた2人が向き合って立っています。

「いや、ただ勝負すんのつまんないからさ」

親指を立ててポーズを取るニヤルガ。急にどうした。

「賭けか。面白そうだな。いいぞ。」

いいんですか。

「じゃあ、私は、私が勝つ方に賭けるから、レイは、レイが勝つ方に賭けてね。」

「ふむ。何を賭けるのだ？」

腕を組んでレイ。

やっぱりやるのか。

「じゃ、私が負けたら本当の姿見せてあげるよん。」
いいのか？

「ほう。興味深いな。」

「じゃ、レイはさ、負けたら今年1年私と遊ぶって事で！」

それは・・・

「キツイな、それ。」

・・・

『あああ！！もうとつくの昔に始まってたあ！』

観客達のいる方で、頭を抱えているミロ。意外と器用だ。

「……………というか、あれ誰だよ？」

「……………いつの間にいたのかしら。まったく気づかなかったわ。」
青年姿のレイを見て不思議がるユウキとミラ。

あんたらが騒ぎ起こしてたときだよ。

『……………でも、戦ってはいないみたいですう。良かったあ……………』

ホツと胸を撫で下ろすミロ。やっぱり器用だ。

「何か、ニアルガが親指立てたりしてるのが見えるんだけど、試合では普通こんなことしないよな……………」

「……………ユウキ、あれは幻覚よ！！ニアルガが真面目にやっていることを信じましょう！！！」

……………真面目に、やってないよな？アレ。

『あ。何か戦うみたいですう。……………って、フニャア！？』

「うわ！？ど、どうした狐！？」

「な、何猫みたいな声上げてんのよお！？」

同時にミロのほうへ振り返るユウキとミラ。

『ひ、久しぶりの召還です……………。ってか、こんなに近くにいるの

にいちいちしなくとも……。あ！二人とも、ちよつと試合に出てきます！！」

敬礼をするニヤルガ。……もはや、狐の粹^{いき}超えてるな？

「召還つて……。あ！」

「う、うひゃあ！？き、狐が消えたーーーーッ！？」

ミロは、宙に現われた手に捕まれて、消えてしまいました

・
・
・
・
・

「ミローー。聞こえますかぁーーーー！」

「……。」

「ミローー？居ないのぉーーーー？」

「……。」

「うん。居ないな」

「……さつきから聞きたいのだが、何やっているんだ？」

レイの目の前には、黄色と黒のストライプ いや、もうはっきり言おう。

阪 タイガーズのメガホン持ったニヤルガが、観客のほうに向かって叫んで（？）いるのだ。

「何って、武器を探してるんだよ。レイはさ、魔法剣で戦うんですよ？ だったらこっちも剣で戦わなきゃあ」

「・・・そっちじゃなく何故阪・・・いや、やっぱりいい。」
何かを諦めたかのように明後日の方向を見るレイ。

諦めないでくれ！唯一の望みが！

阪 のメガホンをウエストポーチにしまいながらニヤルガは不敵に笑った。・・・こ、怖エ・・・。

「面白いものを見せてあげるよ。」

ニヤルガはそういうと、右手につけている指だし手袋をはずした。

「異次元に通じるペンタクルか・・・。便利そうだな、それ。」

ニヤルガの右手には青色で、 が刻んであった。

ペンタクルは、時空と時空をつなぐ為のものである。

ニヤルガのように異次元に通じているものならば、物がいくらでも取り出せるわけだ。便利」

「あはは。私の場合、もっと面白い使い方ができるんだよん。」

ニヤルガの言う面白いは・・・怖いな。

ニヤルガは不敵に笑うと、右手のペンタクルに魔力を流し込んだ。
青色だった星形の刺青が、銀色に輝いた。

入り口が、開いた証拠だ。

「面白い使い方、か……。正直見たくないな……………」
同感だぜ、レイ！

「コレを、こうすんの！！」
ズブズッ！！

右手に左手を、『突っ込んだ』

「んゝ。どっこかなあゝゝ」
ズブ、ズブズブ……………」

「…………グロツ。」
確かに、自分の左手を右手にひじくくらいまで突っ込んでるのは…………グロイ。グロテスクだ……………」

「よし！2つ見つけたあゝゝ」
グチャ！

ニヤルガは思いっきり左手を引きぬいた。

「…………う。何だその生き物は……………」

ニヤルガが引き抜いた左手につかまっていたのは、

白い狐と、黒い狼。

しかもどっちもペンタクルをくぐれるくらいのサイズになっている。

「何って？・・・使い魔」

『オイ！！テメエ何つかんだよ！？ざけんな！！』

『ニヤルガ・・・。こんな近くに居るんですし、呼んでくれたらいいのに・・・。』

今回はサービスで、会話がレイにも聞こえるようになってます

「使い魔・・・か。やるな、ニヤルガ。」

「エヘ　ちなみに白いほうが妖精王で、黒いほうが魔王だよ」
何気にヤパイ事言いましたー！ーッ！？

「ま、魔王って・・・。それって使い魔にしているもんなのか？」

「さあ？いいんじゃない？」

『駄目に決まってるだろー！がッ！！』

『ニヤルガが無理矢理使い魔にしたんですね・・・魔王ボコボコにして。』

・・・こ、怖エ・・・。

『うう・・・。思い出すだけで・・・。コレはトラウマになるよな・・・。』

『分かりますよ、魔王・・・。私も同じような感じでした・・・。』
暗い顔をする狐と狼。・・・器用？

「お前・・・昔ッからこんな感じなんだな。」

呆れた表情をするレイ。

「なーに言ってるんのレイ。私は生まれたときからこんなんだよ
ひ、開き直ったー！ーッ!?」

『オイ、妖精王。』

『何ですか？魔王。』というか妖精王って呼ばないでください。ミロ
です。』

『あん？だったらそっちも魔王って呼ぶなよ。ソーマだ。』

新発見　魔王はソーマって言っらしいです。意外とカッコイイ名前
だ

「ミロ、ソーマ。これから戦うんだよ?」

頬を膨らましてニヤルガが言った。……魔王をボコボコにし
た奴には見えん。

『おお!?マジか!?久しぶりだな!オイ!』

『私達が出てくるなんて……。結構本気ですな?』

テンション上がる魔王と妖精王。……うわあ、こっ書くと凄い
ことになってるみたいな感じ

「ッてことで、変身よろしく!」

親指を立てるニヤルガ。……流行ってるの?

『変身って……。何にだよ?』

「そだな……。じゃ、ククリ刀二本で。」

ククリ刀……。

知ってる人は知っている、超マイナーな武器だ!（ククリ刀好きな

人はすいません・・・。）

『はいよ。』 『分かりました。』

ポン

可愛い音がして、二人の王様はククリ刀になりました。
白と黒のワンセット。

意外と気があつたりとかするのかな？

『しねえよ!!』 『しません!!』

OH! ナイスハモリー!! (カタコト)

「よし 私はさ、いつもなら特に武器使わないんだけど、使えないわけじゃないんだよね。」

二本のククリ刀を逆手に持つニヤルガ。独特の構え方だ。

「ふむ。ではやろうか？」

腰に差してあつたセルリックを引き抜く。

ユウキのグレゴールとは違い、日本刀風なセルリック。
だから持ち運び簡単

「よし。勝って一年遊んでもーらおっと」
じ・・・

地獄だーーーーッ!!!!

負けるなレイ!!

負けたら地獄が待ってるぞッ!?

「・・・では、参る・・・！」

「はいよ」

『行きます』

『おうよ！！』

またもや続く

第8話 王様が2人・・・？（後書き）

作：どーも。銀風です

二：にゃほー。ニヤルガだよ。

作：・・・最近パソコンのやりすぎで肩疲れたー。

二：・・・つい最近は「ゲームのやりすぎで指痛いー」って言うてたじゃん。

作：え”・・・。そ、そうだったっけ

二：それにー、最近更新早いのだってえ、あのゲーム全クリしたからでしょー？

作：・・・長かった・・・。何しろラスボスが三回も生き返って・・・って、何言わせんじゃボケエー！！

二：わーいノリツツコミ

作：・・・チイ。今の私がツツコミの人格だったから良かったものを・・・。

二：あ。本当だあ。「俺」から「私」になってるう。

作：結局男みたいなのは変わりないがな。

二：・・・にしても作者あ。

作：なんだ。

二：なんで多重人格になったのお？

作：・・・はあ。イキナリだな・・・。それは幼いころからたくさん小説を書いていて、主人公の人格が様々だったから色んなのに影響されたんだよ。小説読んでたのもあるけど。

二：幼いつて・・・今も幼いじゃん？

作：・・・黙れ。

二：私より年下・・・
ずどこーん。

（何かが爆発する音）

作：・・・ふう。邪魔者は消えた・・・。

さて 今日はこちらでお終いだヨ 次回をお楽しみにイ
(棒読み)

第9話 最強技・・・？（前書き）

すいませんでしたアアアア！！！！！

なんかもう絶賛鬱中 で！！！！

いくら書いても変になってえ~~~~~・・・

・・・はい。

作者の戯言（言い訳ともいう）は聞き流して小説に行っちゃって下さい。

長い間更新してなかったくせにレベルの低い小説だけでも、どうか読んでくださいます！

第9話 最強技・・・？

「え、ええええ！？な、なんで狐がいきなりあっちに出てきて、イキナリ刀に変わったのお！？」

こちらはミラ、ユウキサイド。

ミロがククリ刀に変わったことに驚いています。

「う、え、ええ・・・つと？と、とりあえず、ニヤルガが本気になったってことだよ・・・な？」

「私に聞かないでよ・・・。」

「・・・が、がんばれニヤルガー。」

「・・・がんばりなさい！」

何がどうなってんだか良く分かってない2人でした

・・・

「にゃ」

「・・・チイ。」

カキーン！

刀同士がぶつかり合い、火花を散らす。
それと同時に反対へ跳ぶレイとニヤルガ。

「う……。化け物か？お前……。」「
痺れた腕を振ってレイが言った。

「……。垂直飛びで2メートル飛べる人に言われるとは、相当だね？

「さ？」

肩をすくめるニヤルガ。

「でも、レイもなかなか強いと思うよッ！」「
レイを指差してニヤルガは言った。

「……。魔王と妖精王より強い人に言われるとは、こっちも相当……。」「

「……。それは褒めているのか……。？」

複雑そうな顔をするレイ。まあ、化け物って言われたしね。

「言ったのレイじゃん。」「

ニヤルガ天の声聞こえるんだ……。

「よし、じゃあ本気で行くからさ、そっちも本気でよろしく」

「今ので本気じゃないのか……。？」

驚いた、というより呆れた、という表情をするレイ。

「え？だってそっちだって本気じゃないでしょ？」

『え……。？そですか？思いつきり来てましたけど。』

「何言つてんのミロ―。だってレイが持ってるのは魔剣だよ？魔法使えるに決まってるじゃーん。」

『あゝ。そーいやそうだな？普通に戦ってたしな……。』

納得する魔王と妖精王。こう書くと……。 (以下略)

「ふむ……。大丈夫なのか？今の俺ではうまく使いこなせていない力だからな……。」

ここら一帯がなくなるかもしれんぞ？」

何気にやばい事言つたー！ー！ーッ！！？？

無くなるって！？消滅ッ！？ここら一帯って規模でデスカッ！？

「大丈夫大丈夫 ここらには一応結界張ってあるし、学園長もいるからオツケーオツケー」

『軽いです……。』

『……。ああ。俺らも本気出したら……。ヤバくね？』

「……。まあ、大丈夫だよ。じゃ、ニヤルガ行っきまーす」
「いやいや、それいろいろとヤバイでしょ！？」

「むう……。仕方あるまい。行くぞ。」

何が仕方ないのさ！？できるならやめてください！？

ニヤルガとレイは、同時に剣に魔力を込め始めた。

・・・

「おやおや。体育館が大変なことになっているようだね?」

ここは学園長室。

そんなところで優雅に紅茶を飲んでいる人物がいた。

「つたくなに優雅にしてやがんだ! あつちでは人類滅亡の危機が……
・!!!!」

「まあまあ落ち着いて銀さん。」

銀さ……!?! いや、それもヤバイでしょ!?! ってか何故に聞こえるんだ!?!

「人生の卓越者^{たくえつしゃ}には聞こえるんですよ、天の声が。」

絡みにくいって……でも、初めて作者以外で呼ばれた名前。
前。

「ふふふ。ではいきますかねえ。」

何所に？学園長サン。

「もちろん、人類滅亡の危機を止めにですよ。」

うつわ、何それ。遠まわしな嫌味？

「いえ、違いますよ。作者。」

そういつて学園長はニツコリ笑った。

酷い！？

・・・

「ひゅー カッコイイね、レイ」

「そういうお前も怖いぞ。」

カッコイイと怖いとは同義語じゃないよ？

レイは、全身に黒いオーラをまとっている。

対するニャルガは、白と黒のオーラが混ざった感じだ。

・・・どっちも怖えよ（汗）

「ミロはさ、光の妖精王なんだ。だから白と黒なんだよ。」
説明するニヤルガ。意外と余裕？

『そですよ。なんか魔王とワンセットで言われるのってものすごい嫌ですね』

『はあ！？俺だつて嫌だツツーに！』

『何ですか？やるんですか？ヘタレ魔王？』

『なんだと！？・・・やってやるよ、電球！』

『で・・・！？何処がですか！？』

『光ってるトコ。』

『ぶ、ぶつ殺ーす！！』

「なんか仲悪いな・・・あの二人。」

『喧嘩するほど仲が良いって言うじゃない』

・・・。

「あ。そーいやセルリックって女の人なんだねー。珍しいよねー。」
喧嘩している二人を無視（？）してのんびりと話すニヤルガ。

『わお！ホントに聞こえるのねニヤルガちゃん！感激だわ こいつ無口だからねえ、話し相手が居なかったのよあー キャハッ』

「・・・まったく・・・。ホントに家宝かと疑うな。」
『残念でしたツ！ホントに家宝だもんねえ。ちゃんとアンタの先祖だつて握ったわよ。』

「・・・できればいますぐ過去に行つて取り消したいな。」

・
・
・
・
。

「なんかまたのんびりになっちゃったけどッ！いくよレイ！」
「・・・俺もいくぞ。」

「ソーマ、ミロ、三段詠唱やるからねえ」
「！……わかった。」
「了解ですニアルガ！」

ニアルガは大きく深呼吸すると詠唱し始めた。

「……古に宿る緋龍^{ひりゅう}よ、我に力を貸したまえ……」
「暗黒に住まう黒龍よ、今ここに現われよ……」
「気高き聖龍^{せいりゅう}よ、今力を解き放て……」

「我流三段詠唱魔法！」

「カオスドラゴン……！」

ニアルガの持つククリ刀から、三匹の
ドラゴンがレイに向かって飛び出した。
紅、黒、白の

「はぁ・・・。できれば使いたくなかったが。」

『ほらほら そんなこと言ってる場合じゃないわよん』

「加減できんが・・・。」

『ソコは気合でカバーよッ』

はぁ・・・と、レイは再び深い溜息をつき、ちよつと真面目にセルリックを捨ててしまおうか・・・と考えた。

『アンタ今失礼なこと考えたでしょ・・・？』
「気のせいだ。」

レイは、セルリックを構えた。
すつと目を細める。

「フ란ツ家流、奥義・・・。」

『「魔神龍破斬！」』

そして、ドラゴンと龍がぶつかり合った

第9話 最強技・・・？（後書き）

作：どうも。またもや銀風です。

ニヤ：ヤッホー 二ヶ月ぶり！

作：はい……。すいません。マジですいません。

次からはがんばりますです、はい。

ニヤ：うん！大丈夫だよ！次遅かったら斬るから

作：（ビクウツ！）そ、そうですねー。

ニヤ：それに前回のお返しもしなきゃいけないしねー……。フフ
フフ。（＊第8話後書き参照）

作：（ゾクゾクゾクウツ！）きよ、今日はこれまで！！さようなら
皆さん！さようなら自分！今度会つときは地獄かもしれませんかと
りあえずさようなら~~~~！！！！

ニヤ：まっちやがれえい~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102d/>

銀の魔法使い。

2010年10月11日01時44分発行